

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 102 号

平成22年10月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960、<http://encounter.agape.gr.jp/>

相沢良一

「黒潮の神学」(黒潮社)より(5)

将に以て鐘に血塗らんとす

良い音色を出すために、鐘に血を塗るが如く、わがうちには、主イエスの十字架の血が注がれているのである。ペテロ第1の手紙には「あなたがたが先祖伝来の空疎な生活からあがない出されたのは、銀や金のような朽ちる物によったのではなく、きずもしみもない小羊のようなキリストの尊い血によったのである」(第1章18-19節)とある。

われわれは、主イエスの尊い血によって、空疎な生活から、すなわち罪の生活からあがないだされたのである。このゆえに「あなたがたは代価を払って買いとられたのだ。それだから、自分のからだをもって、神の栄光をあらわしなさい」(第1コリント第6章20節)との勧告がなされるのである。

からだをもって神の栄光をあらわせとは、良い音色を出せ、ということではないか。この意味において、信仰と倫理とは、軌を一つにするものである。ここにキリスト教信仰の特色が存する。

(75・12)

血を流すことなくば、赦されることなし

聖書は「血を流すことなしには、罪のゆるしはあり得ない」(ヘブル書第9章22節)という大前提に立っております。わたしたちの罪をゆるすものは、燃ゆる宗教的熱心でもなければ、たぎつ後悔の涙でもありません。「御子イエスの血がすべての罪から、わたしたちをきよめるのである」(ヨハネ第1書第1章7節)とあるとおり、ただ主イエス・キリストの十字架のみが、わたしたちの罪を洗いきよめてくださるのであります。ここに、キリスト教の絶対性といわれるキリスト教の独自の立場があるのです。

父親の腎臓を移植されたことによって、その子が生きる力と喜びとを与えられたように、私たちは主イエス・キリストの十字架の恵みによって罪をゆるされ、死に勝つ者とされたのです。

言うなれば、わたしたちは新しい腎臓を移植されただけで泣く、わたしたちの血の中には、実に主イエスの尊い血がそそがれていると言って差し支えありません。父親の腎臓を移植された子は、終生父親に孝養をつくすはずです。

そのように、わたしたちもまた、生涯をかけて神に感謝し、主イエスに忠誠を尽くす、ただこれだけあります。これが信仰生活のはじめであり、おわりでもあるのです。

(76.2)

志の神学

筆者はこれまで度々、信仰は志である事を説いてきた。「為せば成る、為さねばならぬ何事も、成らぬは人の為さぬなりけり」で、人生は決意であり、努力であり、志であることを確信してきた。このような志をわれわれに与えるのが、何よりもキリスト教信仰にほかならないのである。

まさに「神は御意(みこころ)を成さんために汝らのうちにはたらし、汝らをして志望(こころざし)を立て、業(わざ)を行なわしめ給えばなり」(ピリピ書第2章13節)とあるとおりである。

口語訳のほうでは「あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起させ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとされるところだからである」と、このようになっている。この意味において、使徒パウロぐらい志の人はいなかったし、彼は文字どおりキリストのために生き、キリストのために死した人物である。われわれもまた、わが主イエス・キリストのために何事かを成さんとする志において、使徒パウロに追随するところあらねばならぬ。

筆者はさいきん新たに、植村正久の著作集を繙き、あるいは「植村正久とその時代」を読み進むうちに、このように信仰が志であることを最も強調したのはまさに植村正久その人であることに思いをいたしたのである。...彼は日本キリスト教史上、無教会派の内村鑑三と双璧をなしている人物であり、彼の業績はその全集8巻におさめられるとともに、また「植村正久とその時代」全5巻に詳しい。

彼は「信仰と生活」の中で「いかなるものを信仰というか、信仰は形式でない。解釈でない。ある説明に対して、然り、然りと肯定するだけの事でない。単に解ることでもない。信仰は即ち志である。キリストの命令を奉じ、それに志を傾け、誠意をもって従うことである。つまり、全身全生涯をことごとく主イエス・キリストに投じ、すべての物をなげ打って、そのお伴をするのが信仰である」とこのように説いている。

(76.10)

幸いなるかな志を与えられたる者

主イエスの「山上の説教」の中に、さいわいなる人の条件として、心の貧しき者、悲しむ者、柔和なる者、義に飢え渴く者、あわれみある者、心の清き者、平和ならしむる者、義のために責められたる人々があげられています。

わたしはさらに、これに志を与えられ、志を立てた人を加えたいと思います。志こそ、信仰の寵児であり、神の祝福の賜物とむすべきであります。

キリストの使徒パウロにまさる志の人はいませんでした。使徒パウロの働きを記している使徒行伝には、彼がいかに志の人であったかが如実に記されているのです。彼は困難に出会えば出会うほど、その都度「まぼろしを与えられ」、「幻を示され」それに向かって前進を続けました。この幻こそ、じつに彼に与えられた志であり、彼は熱き祈りにおいて、このような幻（ビジョン）を見ることができたのでした。

聖霊を与えられるとか、聖霊を受けると言うのは、そのことによって、わたしたちが宗教的な陶醉状態に陥ったり、あるいは異常な行動に駆り立てられるのではなく、実にイエス・キリストのために何事かを為さんとするの志を与えられることなのです。...

お互い洗礼を受けてクリスチャンになったとき、だれしも必ず何事かを決心し、志を立てたはずです。シュヴァイツァーの言葉をかりるならば、「もし私たちが受洗当時の人間になるならば、われらの教会は、まったく面目を一新してしまうだろう」と言えるのではないのでしょうか。

「まことに日に新たに、日々に新たに、また日に新たなり」で、きょうの信仰は、きのうよりも新しくなり、あすの志は、きょうよりも新しくなるように、向上努力を重ねたいのです。このような志が主によって、いかで祝されずあるべきかは、であります。(77・1)

われは三位一体なる神を信ず

私たちは「日本基督教団信仰告白」に則し、「主イエス・キリストによりて啓示せられ、聖書において証せらるる唯一の神は、父・子・聖霊なる、三位一体の神にいたしましたまう」と、このように信仰告白をいたしております。...

神は主イエス・キリストにおいて語られたのであります。すなわち、神の言が主イエス・キリストにおいて受肉をしたのであります。換言すれば、わたしたちが主イエス・キリストを知ることが、とりも直さず神を知ることであるのです。主イエス・キリストを知るということは、主イエス・キリストの十字架において、このわが罪が赦されたということを知ることであるのです。

「聖書において証せられる」というのは、このことを聖書はわたしたちに、証言をしているということなのです。このようにして、聖書がわたしたちに証(あかし)している唯一の神は、父・子・聖霊なる三位一体の神にいたしましたまうのです。

これは、代々の教会のみならず、今日の私たちの教会にとっても、じつに大切な信仰の告白であるのですが、それだけに、また理解しにくい面もあると思うのです。三にして一、一にして三という一見矛盾するようなこの「三位一体」という表現の中に、実は唯一の神に対する無比なるキリスト教の信仰の告白がこめられているのです。

そもそも、わたしたちが父なる神について語る場合、み子なるイエス・キリストによる啓示を除外して語ることはできないのです。み子なる主イエス・キリストが、私たちの主にして救い主でいましたまうということは、神のみ霊(たま)の啓示によらなければ、到底理解することはできないのです。...

子なるキリストの深い意味は、人間の理性によってとらえられるのではなく、神のみ霊(聖霊)によって、上より啓示せられるのであります。...

(79.4)

み名は讚むべきかな

国立市にお住いの、医師中嶋義四郎先生は、もう 90 歳におなりだろうか。その都度お励ましのお便りをいただいているが、最近はスペイン語の聖書を読んでおられる。

「別紙は小生の信仰告白でございます。御教会に見える求道者の方に御一読願いたいと思います。...」

以下は中嶋先生の入信記録の抜粋である。

「わたしは 50 近くになるまでキリスト教のことなど全然知りませんでした。ところが私の長女が...東京にも B29 が来襲するようになった 19 年の歳末、クリスマスの翌日、薬の欠乏、食糧の欠乏、薪炭の欠乏のさなかに 16 歳で生涯を閉じました。...

告別式をすませた次の日曜日から私は欠かさず礼拝に出席いたしました。しかし聖書も讚美歌もありませんでしたので、会衆にあわせて讚美歌を歌い、聞き馴れない説教に身にを傾けて帰るのでした。

翌昭和 20 年のイースターが近づいて来ました。牧師はイースターはキリスト教のたいせつな日であるから、その日に受洗してはどうかということでした。私は勧められるままに、何のためらいもなく承知しました。

受洗記念に聖書も頂きました。...私はそれまでに聖書を読んだこともなく、したがってイエスさまがどんな方かなど、名前だけで何も知らなかったのです。...とにかく仕事を終えて帰ったら出来るだけ毎日読むことにしました。かれこれ半年もかかって新約の方をすませますと、すぐ旧約に取りかかりました。これは大冊ですので、約 1 年ぐらいはかかったように思っています。

私の入信はかくの如くでした。全く普通の方の入信とはあべこべでした。キリスト教のことは何も知らずに受洗したのでしたから...」

16 歳のお嬢さんの死が、このように、お父さんをして信仰に導かれたのである。

(85・1)

案山子（かがし）立つ神より弓矢賜りて

今から 50 年も昔になる。小川正子さんの「小島の春」を読み、感激の余り出版社の長崎次郎氏に手紙を書いた。おりかえし長崎氏よりお礼状が届いた。20代になったばかりの感受性の強かった学生時代の思い出である。

この度、玉木愛子さんの「わがいのち、わがうた」を読み、あの 50 年昔に受けた感激がふたたび甦った。その後送られてきたこの本を、あの方、この方に差上げた。この本の扉には、「案山子（かがし）立つ神より弓矢賜りて」という著者の句を書かせていただいた。

この句については、1948 年刊行のわが処女作「自己認識と神認識」に次のように記されている。

「ちょうどただ今救癩教会の月報が送られてきました。それには癩のために右足切断、しかも両眼失明の一婦人の「案山子立つ神より弓矢賜りて」という歌が載っていました。一本足の案山子は、今も見えざる聖手にすがりつつ強く立とうとこのように書かれてありました。

私は首が垂れました。見よ、ここに、この婦人は立っている。彼女を立たしめているものは何か。それが神の愛であります。神、われと共にいまし給うとの力強き信仰であります。一本足の案山子は、今もなお見えざる聖手にすがりつつ強く立とうと申している。神は有りや無しやとの議論ではありません。神は彼女に現在し給う。私はここだと思うのです。この婦人は人生において最も不幸である。しかし、この婦人のかく立っている事自体が神の栄光をあらわしているのではないのでしょうか。彼女をとおして神は生きていたもう。されば、彼女の生はこの意味に於て絶対的なものなのです。」... 筆者は本書を読み進むうちに、幾度涙をぬぐったであろうか。これはただ単に著者の受けた苦難に対する同情の涙ではなく、著者の信仰と教養の輝きのゆえに、キリストの香りが豊かに放たれていたからである。...

(87.1)

ベテスタの池の物語

エルサレムにある羊の門のそばに、ヘブル語でベテスタと呼ばれる池があった。そこには五つの廊があった。その廊の中には、病人、盲人、足なえ、やせ衰えた者などが、大ぜいからだを横たえていた。[彼らは水の動くのを待っていたのである。それは、時々、主の御使がこの池に降りてきて水を動かすことがあるが、水が動いた時まっさきにはいる者は、どんな病気にかかっているもいやされたからである。]

さてそこに38年の間、病気に悩んでいる人があった。イエスはその人が横になっているのを見、また長い間わずらっていたのを知って、その人に「直りたいのか」と言われた。この病人はイエスに答えた、「主よ、水が動くときに、わたしを池の中に入れてくれる人がいません。わたしが入りかけると、ほかの人が先に降りて行くのです。」イエスは彼に言われた、「起きて、あなたの床を取りあげ、そして歩きなさい」。すると、この人はすぐによされ、床をとりあげて歩いて行った。その日は安息日だった。」(ヨハネ福音書5章2-9節)

マタイ、マルコ、ルカによる福音書における癒しの奇跡物語には、「あなたの信仰があなたを救ったのだ」という主イエスのお言葉が必ずと言ってよいほどつけ加えられているのですが、ここでは「起きて、あなたの床を取りあげ、そして歩きなさい」と主イエスはお命じになられただけでした。...私たちの病がいやされたということは、主イエスが「わたしたちのわずらいを身に受け、わたしたちの病を負うて」下さったからであります。...からだの病のいやしは、一時的であります。こころの病のいやし、すなわち罪のゆるしは永遠的なものであります。それは死の克服と結びついているからであります。主イエスによる一時的な病のいやしは、実は永遠的な罪のゆるしである、と...思うのであります。(88.3)

ザアカイの回心記

さてイエスはエリコに入って、その町をお通りになった。ところが、そこにザアカイという名の人がいた。この人は酒税人のかしらで、金持であった。彼は、イエスがどんな人か見たいと思っていたが、背が低かったので、群衆にさえぎられて見ることができなかった。それでイエスを見るために、前の方に走って行って、いちじく桑の木にのぼった。そこを通られるところだったからである。イエスは、その場所にこられたとき、上を見あげて言われた、「ザアカイよ、急いで下りて来なさい。きょう、あなたの家に泊ることにしているから」。そこでザアカイは急いでおりて来て、よるこんでイエスを迎え入れた。

(ルカ福音書 19・1-6)

ザアカイが主イエスを求めるより先に、主イエスはこのザアカイを求めておられたのでした。その場所にこられた主イエスは、「上を見あげて言われた、「ザアカイよ、急いで下りてきなさい。きょう、あなたの家に泊ることにしているから」(5節)とみ声をかけて下さったのでした。ザアカイにとっては青天のへきれきでした。

私たちが主イエスに出会うということは、まさに、このようなことではないでしょうか。わたしたちがさえぎられているものを自分で打ち破るのではなくして、主イエスご自身が、この私をさえぎっているものを打破ってくださったのであります。...ピリピ人への手紙の中で、使徒パウロは、「キリストのゆえに、私はすべてを失ったが、それらのものをふん土のように思っている。それは、わたしがキリストを得るためであり、律法による自分の義ではなく、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基く神からの義を受けて、キリストのうちに自分を見いだすようになるためである」(第3章7-9節)と述べております。ルカ福音書に描かれているザアカイの回心物語を神学的に叙述するならば、この使徒パウロの信仰経験と軌を一にいたしておると言わざるを得ないのであります。(89.7)

神に義とされたのは誰か

パリサイ人は立ってひとりでこう祈った、「神よ、わたしはほかの人たちのような貪欲な者、不正な者、姦淫をする者ではなく、また、この取税人のような人間でもないことを感謝します。わたしは1週に2度断食しており、全収入の10分の1をささげています。ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようとししないで、胸を打ちながら言った、「神さま、罪びとのわたしをおゆるしてください」と。あなたがたに言うておく。神に義とされて自分の家に帰ったのは、この取税人であって、あのパリサイ人ではなかった。おおよそ、自分を高くする者は低くされ、自分を低くするものは、高くされるであろう。」(ルカ伝第18章9-14節)

わたしはこの物語を、主イエスのたとえ話としてではなく、著者のルカによる伝道説教として読み直してみたいと思います。...

彼が伝道説教の助けとしたのは、使徒パウロのローマ人への手紙でありました。「しかし、今や神の義が、律法とは別に、しかも律法と預言者とによってあかしされて現された。それは、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、すべて信じる人に与えられるものである。...」

ルカは医者でした。彼はパウロから「愛する医者ルカ」(コロサイ書4の14)と呼ばれ、若き日には使徒パウロと伝道の行を共にしたこともあったのです。ルカがこの「ルカ福音書」と「使徒行伝」を世に出したのは、パウロの殉教後20年から30年ほどの間でありました。そのころにはパウロが諸教会に書き送った数々の手紙は、写本として多くの人に愛読されていました。それらの手紙が歴史家ルカの目にとまらない筈はあり得ないのでした。ルカが自ら編纂した救い主イエス・キリストの言行録のなかに、この「パリサイ人と取税人の祈り」の物語を集録した際、使徒パウロの手紙に思いをいたし、彼のこころは燃えあがらずにはおられなかったことでしょう。(90.3)